

# 弓

2006(平成18)年10月9日鑑賞(テアトル梅田)



監督・脚本・製作＝キム・ギドク／出演＝チョン・ソンファン／ハン・ヨルム／ソ・ジソク／チョン・グクァン（東京テアトル、ハピネット配給／2005年韓国映画／90分）

……毎回感嘆させられるキム・ギドクの世界だが、第12作目のテーマは「決して所有することのできない少女」を通した孤独な老人の欲望と希望……。広い海に浮ぶ一隻の漁船を舞台とし、ある時は武器に、ある時は楽器にと大活躍する弓をモチーフとした幻想的な無言劇は、まるで舞台の上で綴られていく美しい神話のよう……。イレギュラーながらも平穩だった老人と少女の世界は、青年の出現により対立点が明確になるが、この物語にはいかなる結末が待っているのだろうか……。そして、「弓のようにぴんと張った人生を歩みたい」という監督のメッセージを、あなたはどのように受け止めるだろうか……？

## 天才キム・ギドク監督の第12作は……？

私はキム・ギドク監督には「天才」という冠をつけることにしている。その天才キム・ギドク監督の第12作目は、前回の『うつせみ』（04年）（『シネマルーム10』318頁参照）に続き、これまた「弓」をモチーフとし、老人と少女そして青年を登場させた実に不思議で哲学的なそして幻想的な世界。

キム・ギドク監督がこの映画で描くのは、「決して所有することのできない少女」を通した孤独な老人の欲望と希望……。そしてタイトルとなっている「弓」は、ある時は武器にある時は楽器になっており、強さと美しさを象徴する小道具として使われている。

「死ぬまで弓のようにぴんと張った人生を歩みたいと思います」というのが、キム・ギドク監督から観客へのメッセージ……。例によって、低予算で短期間製

作、そして全くセリフのない2人の主人公が90分という凝縮された時間内に織りなす物語へのあなたの傾注度は……？

## ワイドリリース方式批判！

昨年の『トンマッコルへようこそ』（05年）の800万人、今年の『王の男』の1300万人に続いて、韓国では7月27日公開の『グエムル 漢江の怪物』が1カ月余りで1240万人動員という快挙を成し遂げた。しかしこれには、国内のスクリーン数で4割弱、観席数で7割近くを独占した「ワイドリリース方式」という上映方式が大きな役割を果たしている（2006年9月17日付日経新聞参照）。

この方式は、一面ではこのような超大ヒットを生むものの、他方では良質な映画の上映機会が奪われるという弊害がある。そこでキム・ギドク監督の最新作『時間』の試写会で、キム・ギドク監督が「グエムルの独走を『韓国映画の水準と韓国の観客の水準が最高点で出合った』と痛烈に皮肉った」ことが話題を呼んでいる。しかし『時間』を上映したスクリーンはわずか12というのは、いくらなんでも片寄りすぎなのでは……？

## まずは少女に注目！

まずは出演する女優が誰かに目が向いてしまう私は、この映画に『サマリア』（04年）で、「セックスのとき、男はみんな子供になるのよ」というセリフをくり返しながらか、何の罪の意識もなく、いつも微笑みながら援助交際をくり返し、男を包み込んでいた女子高生チェオンを演じた（『シネマルーム7』396頁参照）ハン・ヨルムが出演していると聞き、これは絶対観なければと思ったもの。

『サマリア』では「バスミルダと寝た男は、その後仏教徒になった」というインドの説話集にあるバスミルダの役割を演じて強い印象を残した彼女が、『弓』では6歳の時に拾われてきて、もう10年間も老人と2人で船の中で生活している少女を演じている。そしてこの少女こそ、老人が欲望と希望の対象として一見所有しているかのように見えるが、「決して所有することのできない」少女。

『サマリア』では、死ぬ時まで一貫して笑顔を絶やさないバスミルダのような少女役だったが、今回ハン・ヨルムは前半の常に微笑んでいる少女から、後半は

一転して老人に対して敵意に満ちた目を向ける少女を熱演。といってもセリフが全くなく、目と表情のみの演技だが、若くしてこんな演技ができるのは、日本では宮崎あおい、韓国ではハン・ヨルムくらい……。

## 老人は仲代達矢風……？

映画上の設定では老人は60歳だが、この老人役を演ずるチョン・ソンファンは1940年生まれだから、少し年齢は上。これまたひと言もセリフをしゃべらず、少女への愛(?)と少女へ言い寄る男たちへの嫌悪感を露骨に示すこの頑固な老人を観ていて、私が思ったのは、この老人は仲代達矢そっくりだということ。実年齢は仲代達矢の方がずっと上だが、その顔つきといい表情といい演技ぶりといい、私にはそっくりと思えたが、さてあなたは……？

それはともかく、この映画が面白いのはこんな60歳の老人が、少女が17歳になる誕生日を指折り数えながら(具体的には、カレンダーを1日1日消していきながら)楽しみに待っていること。

まともな常識で考えれば、そもそも10年間も1人の少女を船の中に閉じ込めておくこと自体異常かつ犯罪行為であることは明らかだし、美しくかつ女として成長する17歳を待って、結婚式を挙げるという身勝手な発想もスケベ親父として非難されるべきことも明らかだ。ところが、この映画ではそんなシチュエーションの異常さは問題とならず、むしろ人間の本性を浮き彫りにするための大前提として立派に機能している。

大きな海の中にたった1隻だけ浮かんでいる大きな漁船と連絡用の小さなはしけという舞台の中で演じられる劇のようなシンプル化した設定こそ、キム・ギドク監督の構想力のすばらしさを示すもの。そこでさて、この天才監督の意思をスクリーン上で体現する仲代達矢風の老人の説得力は果たしていかに……。

## 安定から対立へ……

老人と少女だけの2人の世界が永久に続くのかどうか？ それは誰にもわからないが、90分という設定の映画の中で面白いストーリーにするために、冒頭からずっと観客に示してきた老人と少女だけの閉鎖的だが安定した世界を激変させな

ければならない。17歳の誕生日を迎えようとしている少女は、当然、肉体的にも精神的にも少女から女への転換点にあることは明らかで、そこに油を注ぐのはもちろんオトコ……。

釣り客の中には老人と2人だけで生活している、この美しい少女に対して露骨な関心を示し、ちょっかいを出そうとする奴もいるが、それに対しては容赦なく老人の弓から矢が飛んでくるから要注意！ しかし、ある日、父親（チョン・グクァン）と共に始めてこの漁船に釣り客として訪れてきた青年（ソ・ジソク）はハンサムで優しい男。たちまち少女はこの青年に関心を示し、はじめて自らの意思で青年に接触していくことに……。

その結果、この船の中ではじめて生まれてきたのが青年と老人の対立。この青年と老人の対立の論点は、この少女を老人が所有し束縛することができるのか否かということ。そして当然その答えは明らか。しかし問題は、人間にはわかっていてもできないことがあるということだ。

果たして老人は10年間育ててきた少女への想いを断ち切り、青年が主張するように少女を自由にし、両親の元へ、あるいは青年の元へ引き渡すという行動をとることができるのだろうか……？

### 見せないのがミソ……？

弓をモチーフとしたこの映画で、キム・ギドク監督が天才の天才である所以を見せるのが弓占いのシーン。これは合計3度登場するが、1度目2度目は3度目の本チャン占い（？）を印象づけるための予行演習であったことが、映画鑑賞後わかる……。

この危険極まりない弓占いの撮影をどのような形でやったのかはパンフレットを読めばすぐわかる。また、船体の腹に描かれた観音像の見事さにも圧倒されるが、何よりも面白いのは、弓占いの結果を監督が観客には教えてくれないこと……。つまり、3本の矢がどこを射抜いたかによって、占いの結果は少女から老人へ、そして老人から客へと耳ごしに伝えられるのだが、キム・ギドク監督はあえて観客をその弓占いの枠外に置いてしまうという暴挙に……。すると、その結果はどうなるか？ 観客はその結果がどうなったかという興味と関心が高まり、

一種の飢餓状態に……。それこそ天才キム・ギドク監督が望んだ効果だ。女性のヌードと一緒に、何でも見せればいいというものではなく、やはり見せないのがミソ……？

## 弓占いの結果は……？

青年が老人に求めた弓占いのテーマは、少女は外の世界に旅立つことができるのかそれとも老人と共に船の中に残るのかということ。その結果は、少女の口から老人の耳に、そして老人の口から青年の耳に伝えられたものの、観客に対しては何のアナウンスもなく、老人や青年の表情からもその結論を読み取ることはできない。

しかしその後のストーリー展開を見れば、青年の希望どおりの結果が出たことは明らか……。青年が操作するはしけに乗って、少女はいよいよ新天地へ向かうことになったのだが……？

## 思いがけない「綱引き」が……

この老人は意外にも（？）、自ら行う弓占いの結果に対して諦めが悪いよう……。他人に対しては運命を受け入れるよう厳格に要求するにもかかわらず、自分に対してはひょっとしてその点が少し甘いのかも……。そんな疑問を持たせたのは、老人がはしけと漁船とをロープで結び、そのロープの端を自分の首にくくりつけるという行動をとったため。こりゃ一体ナニ……。これではしけが漁船から離れていくのを止めるの……。それとも、当てつけ的な自殺をするつもり……。？

観客にそんな疑問を持たせつつ、スクリーン上では文字どおりの「綱引き」が展開されるが、それが一発逆転打となったから驚き……。ロープによってはしけの進行が止まったことに驚いた少女が、直ちにロープを切り漁船に戻ってみると、そこには首にロープをかけたまま横たわる老人の姿が……。そんな姿を見て、17歳直前の少女が驚き感動したのはある意味当然。そこで少女は死ぬ直前だった（？）老人を抱きかかえ、泣きじゃくりながら、遂に老人と結婚式を挙げる決意を固めたのだが……。

## 思いがけない結末へ……

この映画の中で展開される韓国式結婚式の儀式がどこまで正確なのかはわからないし、少女がなぜ肅々とそんな儀式をこなせるのかもわからないが、そんな嫌味な詮索は横に置き、色彩感豊かで厳かな2人だけの結婚式の有り様も、この映画の見どころの1つ。

三々九度の杯の後、はしけの中央に敷かれたシートの上で、1枚また1枚と少女の婚礼衣装を脱がせていく姿は、いかにもこれからはじまる新婚初夜の姿を想像させるもの。しかし、その後老人がとった行動は、少女から離れてはしけの先頭に立って弓を奏でるといふ意外かつロマンティックなもの……？

その美しい音に包まれながら白い服1枚の少女は眠りに落ちていくが、その後の展開は私たちの予想をはるかに超えるもの。したがって、それをここでバラすわけにはいかないが、ここで生きてくるのがパンフレットにある小倉紀蔵氏の「水平の矢と垂直の矢」の意味。

すなわち、「水平の矢」は獲物を殺し、敵を倒し、自らの欲望を満たすために放たれるものだが、「垂直の矢」とは……？ そして、垂直の矢を放ち終えた老人がとる行動とは？ さらに、それによって少女の身体に起きる異変とは……？

この結末こそ、この物語を「神話」にしている所以であり、かつ私がキム・ギドク監督に天才という冠をつける所以……。

2006（平成18）年10月10日記